

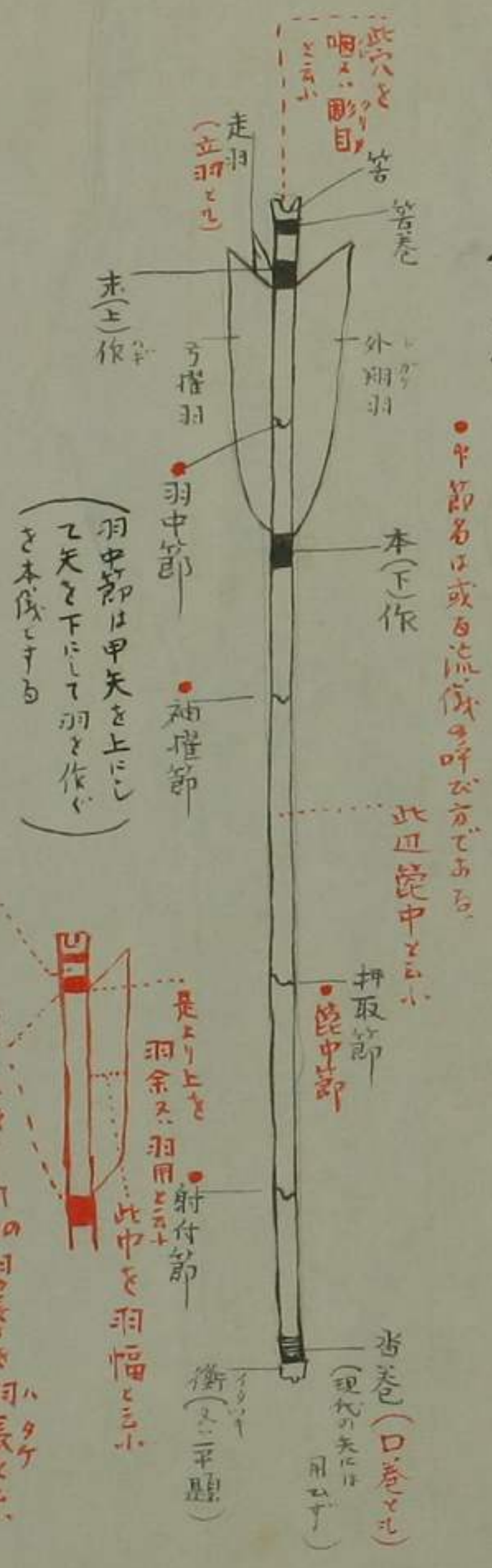
矢之書  
村井五郎編

特別  
ケ 5  
916

御  
印



# 矢名所



矢拵様には種々ありて、その使用の目的によりて各特色あり。現代用ひられ居るものは、前掲の如きものにして、只番巻

弓道を研究せしとする学徒の爲めに  
研究の一端たる矢について少くも  
に図示して諸君の参考には供せんと  
すらしめどもある。

昭和三十一年夏日

武藏野廣野荘

村井五郎





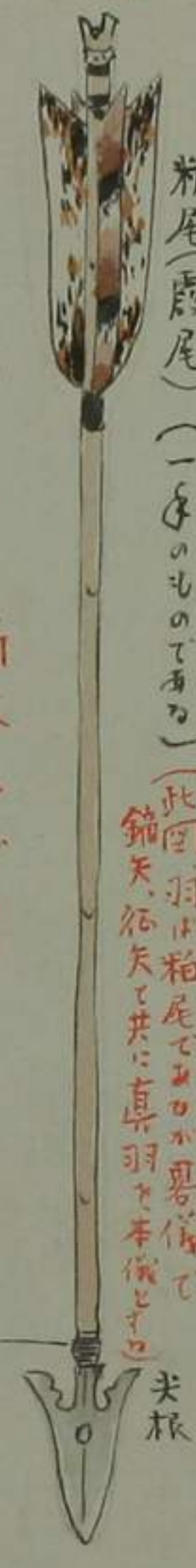
又走羽外向  
 羽中を貫す  
 赤より二伏を  
 きて夫束を  
 赤うむしむ  
 ち二分正  
 征矢様  
 矢は節  
 節は押取寄  
 さ本二サヤ  
 し、射目  
 節は黒漆に  
 べし、雷差全前  
 中たきは入り系  
 注るべし  
 赤漆ちんじ  
 4 雷差二伏  
 中たき一伏  
 せし  
 又、矢は射るに用ゆる矢にして、よく軍記方などに、  
 二十四さいたる、何々の矢、頭高に貫くものありものと  
 云わ、柄、鏑矢に似たもの、羽は三立にして、鏑と附せし、  
 根は鐵と稱して、煉、石、木、たる、鋭きものを用ひ、その  
 形態、千差万別あり、大、小、大、小、指、頭、大、の、もの、を用ひ、  
 羽は各人の好しなるもの、大鳥を以て、三上とする、  
 大鳥(妻星)



是は戰時實戰に用ゆる矢にして、よく軍記方などに、  
 二十四さいたる、何々の矢、頭高に貫くものありものと  
 云わ、柄、鏑矢に似たもの、羽は三立にして、鏑と附せし、  
 根は鐵と稱して、煉、石、木、たる、鋭きものを用ひ、その  
 形態、千差万別あり、大、小、大、小、指、頭、大、の、もの、を用ひ、  
 羽は各人の好しなるもの、大鳥を以て、三上とする、  
 大鳥(妻星)

### 矢

此矢は鏑矢と天に冠の表差、鏑に用ひらるものあり、  
 その柄、鏑矢と異り、鏑と附せず、方その鏑は、  
 鏑と附せず、方その鏑は、  
 鏑と附せず、方その鏑は、  
 鏑と附せず、方その鏑は、



### 墓目 (引目 挽目) (ヒキメ)

此矢は先端に墓目と稱する一種の鏑を附せ  
 れてあるもので、その使用せらるる、場所、時  
 なぞによりて、名称、形を異にする、即ち  
 産所に用ゆるる産所墓目、笠懸墓目  
 その種類は、大射墓目、笠懸墓目  
 屋越墓目、小笠懸墓目、誕生墓目  
 等各種あり、木製で中を空とし、  
 箇の穴さうがちたるもので、御音目、畧  
 と畧と云ふ小説もある、是を射る時は  
 目、即ち穴に風入りて音響を奏す  
 故に此名ありと云ふ、而して是れによりて

### 悪魔を拂ふて云ふ

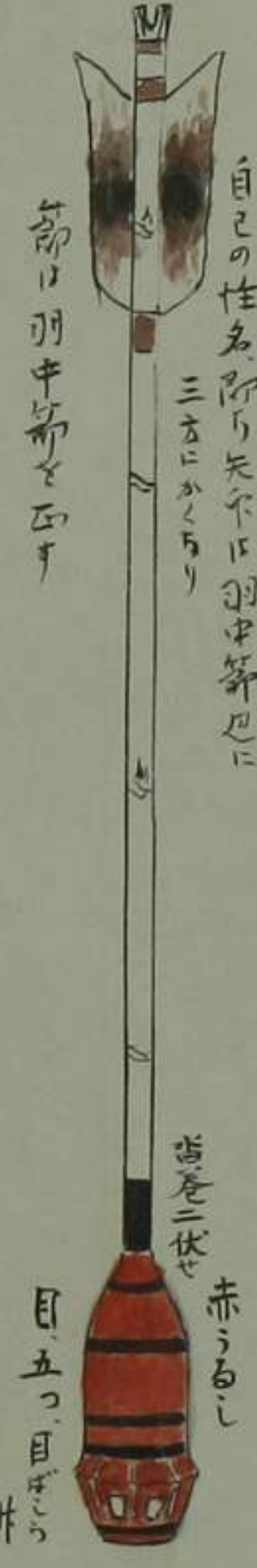
木は朴の木を本儀とし、桐、竹は畧である、  
 大小はその人の予勢によるが、笠懸の差  
 を一寸違ひにするのが定法である、例へば、  
 五寸半は横の太さは六寸とする、始めは  
 木をくりぬきて、空洞を作ったが、今は木を  
 二つに割りて中をくり、後ちに合せて作る、  
 塗色は赤を本儀とするが、畧には黒いもある、

悪魔を拂ふて云々

木は朴の木を本儀とし桐竹は畧である。大小はその人の才勢によるが、豎横の差を一寸違ひにするのが定法である。例へば豎五寸ならば横の太さは六寸とする。始めは木をくりぬきて空洞を作すが、今は木を二つに割りて中をくり、後ちに合せて作る。塗色は赤を本儀とするが畧には黒もある。籠は白籠時鳥籠の場合もある。羽は大鳥鷹鶴等が多く用ゐられる。三五々、一例として大射墓目を龍に掲げて見り

### 大射墓目 (一瞬即ち四本) (イヌイヒキメ)

籠は白籠、羽は真羽、三立、ツギギ古、糸作、梓作也



此外尤に二三引目の例を挙げて見る

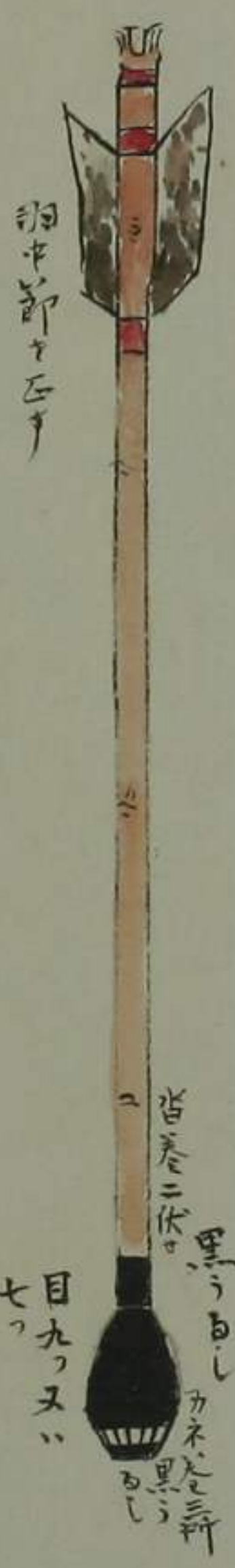
### 笠懸墓目 (一本) (カサカケヒキメ)

籠は白籠、真籠、三立、ツギギ古、糸作、梓作也



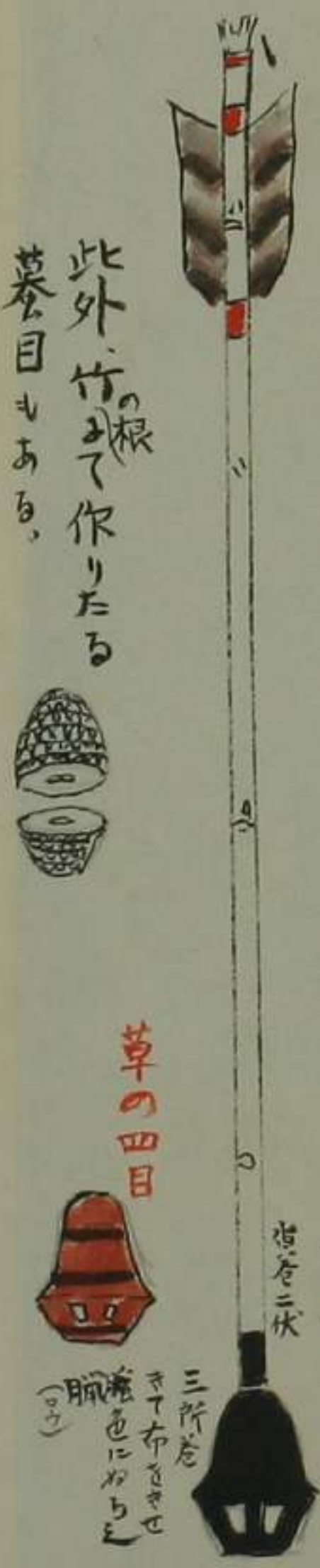
### 小笠懸墓目 (一本) (コカサカケヒキメ)

籠は白籠、真籠、羽は真羽、三立、ツギギ古、糸作、梓作也



### 四目の墓目 (一季四目) (ヨツメヒキメ)

籠は白籠、三立、ツギギ古、糸作、梓作也



### 墓目之図



墓目の寸法は、射字の才勢によるが、大は一尺位から小は三四寸位である

尚編者が昭和九年九月二十六日甘泉園  
早大弓道場に於て道場披きに行ひたる小  
笠原流墓目の式に用ひたる黄白目也

一 飛天 (一本)

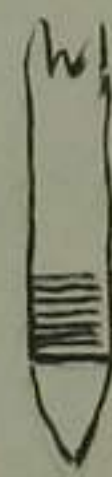


木製

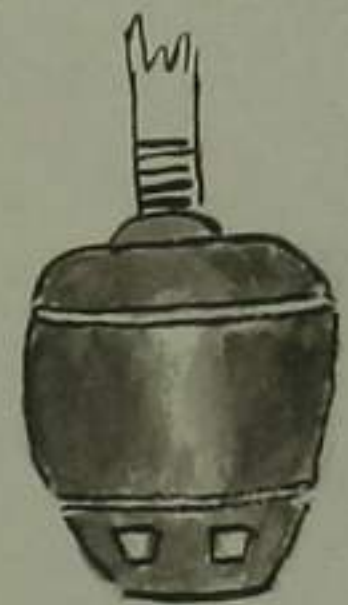
麻糸

認

一 手角木 (二本)

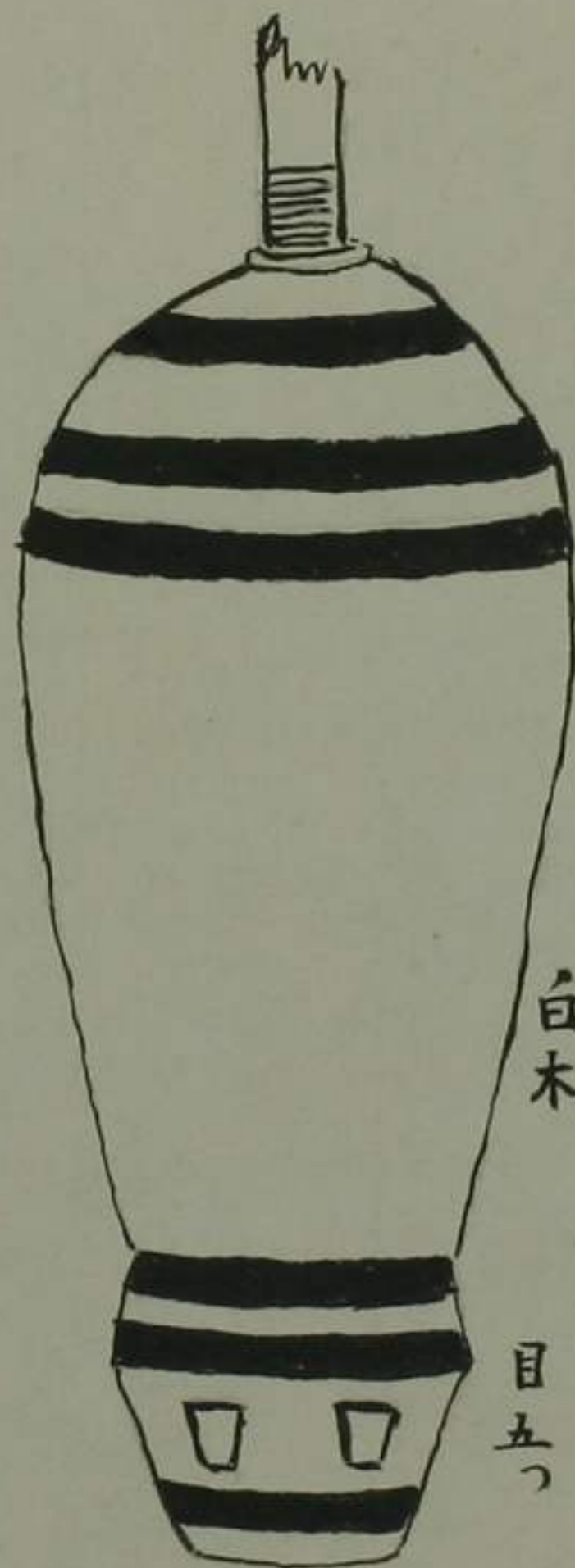


白角



水牛製

一 四目 (二本)



白木

目五つ

此外尤に二三、昭和十三年九段遊就館を見学  
した時の例を挙げて見よ (名称は全館の標示により)  
(何れも実物大見取図)  
産所引目

墓目之図



目柱 (竹又は角)

墓目の寸法は射字の弓勢によるが  
大は一尺位から小は三四寸位である  
此図は六寸位である

此外竹の根  
墓目もある



草の四目



三所を  
考へたる  
胸巻色に  
おらる

胴をくぼめて  
挫目 (こぼし) をつける

風返

じりめ



木製 麻糸

認

尚編者が昭和九年九月二十六日甘泉園  
早大弓道場に於て道場披きに行ひたる小  
笠原流蓑目の式に用ひたる蓑目と  
尤に掲ぐ。鶴の羽を本儀とす。白范、自作。三立。



目三

目ハツを用ゆ  
る場合もある



神頭 (矢頭、磁頭、實頭)

これは蓑目に似たるものであるが、その形既して  
少く、空洞なきものである。普通は木製で  
あるが、時々鉄製もあり。是を金磁頭と云  
ふ。此は物さくたく為めか、又、敵を射倒す為  
めに用ひらる。神頭矢の一二の例を  
掲げる

一手神頭 (草鹿丸切、挾物、射に用ゆ)

鏡は直鏡、白鏡。一説に節影鏡と本儀とす。此は  
羽は真羽、雄、三立、管はハシギ管、糸作也

挾物は白鏡  
交々作、大鳥  
鷹羽、白尾を  
用ひ大鳥を走

又、即、云す  
大ぬ塗色





野矢 (獵天と鹿矢とも云ふ) (狩矢 得物矢とも云ふ)  
 狩猟に用ゆる矢で、羽は樵作と云うて羽  
 き、其すそのまゝ作り、  
 野矢も時に軍陣  
 に用ゐられた。  
 保元物語に  
 爲朝(平家)  
 九つ指たる野矢  
 實物物語に  
 伊東の嫡子  
 浜津三郎  
 白くしつゝの  
 鹿矢笠高  
 に負ひらし  
 ちと見らるるなり

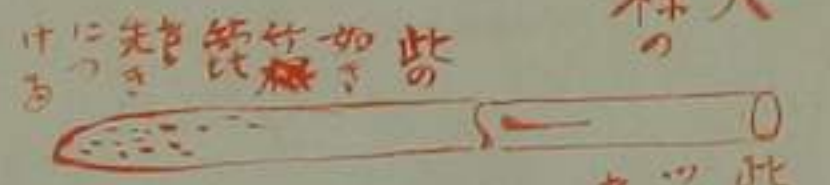


山都赤人の歌  
 足夷の山にも野にも狩人  
 得物矢たはさし乱れたる見ゆ  
 木製古代矢  
 長三尺二寸五分

是は野魂又は血矢と云て餘長一寸二分位上刻白にして、篋は全射  
 本製にして未塗り昭和九年三月三越七階まで、建武中興辰の射  
 千葉の染谷嘉次郎の出品と云ふものなり、若干は百年前のものと云ふ

右に掲げたる以外に現在用ゐられて居る  
 的矢  
 一般的前に用ゐられ  
 遠矢  
 篋を細くして軽く作り、自己の矢尺より  
 も少し長く作るを普通とし、三十間  
 位より遠的に用ゐられる

堂矢  
 此所より  
 此の  
 矢の  
 例



差矢 又ハ堂矢、堂前矢とも云ふ  
 現在これを行人は少いが、京都三十三間  
 堂前に用ゆる矢である

清水へ近き  
 御堂の  
 矢数かな  
 吳御  
 ほんのほと  
 羽に明り  
 行く矢数かな  
 蕪村

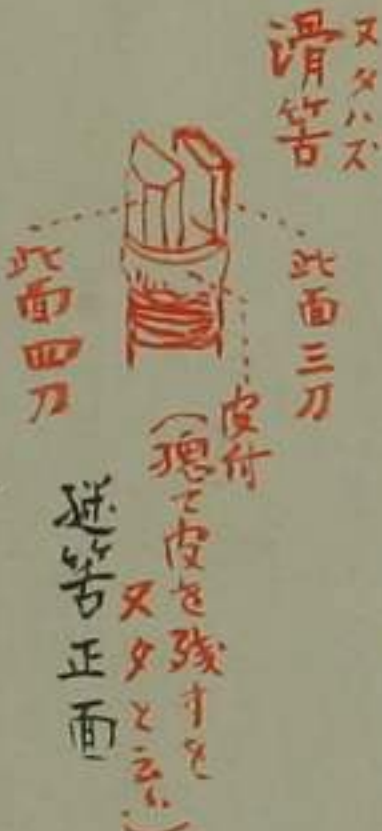
篋の作り様色々あるが、  
 一、ぬぐる篋比、全漆して我度もぬぐるもの  
 二、節影篋、右上下を漆して塗りて、黒さ出  
 前ハ、矢の篋がそれである  
 何物も塗れず、そのまゝのもの  
 火を入れて適るに焦し、色を  
 つけたもの、現々一般に用  
 られるもの、その都合によりて  
 派中に長くつけ置きて  
 黒色となつたもの、又は煤に  
 濡例へば、黒塗にしたもの

菅の事  
 現今は信濃高野、庄島  
 水戸、依模、静岡等に  
 産するが、三年竹(時に二  
 年)も産す、毎年一度  
 秋に切り、篋を作る工程(應選)  
 は中々に手数のかゝるもの  
 ので、先づ火の燻道  
 釜の中を敷回して、曲り  
 を通す、これを荒燻と云ふ、次に中火、小煎、石磨き(水分をとり)、再び火入れをす、これにて  
 薄火、中火、濃火、乾火、乾燻等、未火入れをし、曲りを矯める、これをオキタメと云ふ、  
 次に竹磨き、トクワ洗ひ(水分をとり)、再びオキタメをす、均合を直し、又オキタメをす、曲を矯めて  
 出来止るのである、此外、砂磨皮付篋がある

一、共筥、篋そのものに筥を切ったもの、多く  
 は、矢筥等用ゐられる、一般に、筥用筥と  
 二、延筥、筥を別に作り、篋につくもの、  
 その筥の作り方も種々あり、現々  
 の一般に用ゐられるもの、此中  
 ノ一つである、材料も種々あつて  
 根竹、角筥等々作り、滑田筥  
 と云ひて、角筥、六角筥、八角筥も  
 角を立て、削る事もある、これは  
 又タメの、錆の心得がある、  
 又筥を云ひて、竹を削り、比よりも  
 少し太くする。

筥の事

共筥、延筥、角筥、滑田筥、六角筥、八角筥



滑筥 又タメス  
 此面三刀  
 此面四刀  
 延筥正面  
 延筥背面  
 側面  
 だてに切る面  
 四面と三面と  
 する

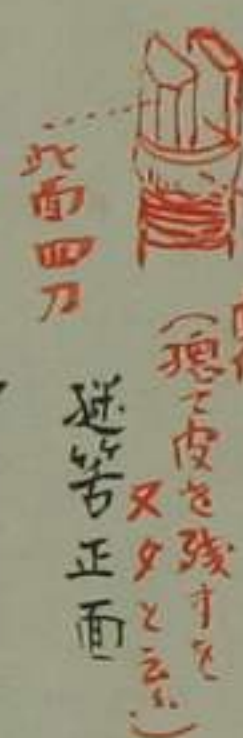
決りに竹磨き、トクワ洗ひ(水分をとり)、片云クキタテにて均合を直し、又、オキタを、曲を矯めて  
出来上りのてある。此外、砂磨、内付、能くある。

### 筈の事

一 共筈 筈そのものに筈を切りたるもの多く  
は矢筈に用ひらる。一般に角筈と云ふ

二 延筈 筈を別に作りて、筈につぐもの  
その筈の依り方も種々あり、現今  
の一般に用ひらるものも、此中  
一つであり、材料も種々あつて

又タハズ  
滑筈 此面三刀  
延筈 此面四刀



根竹、角筈を依り、滑田筈  
と云ひて、角を、六角、八角、角をも  
角を立て、削る事もある、これは  
又タメの 鍔の心得である。

又筈と云ひて、竹を作り、筈よりも  
少く太くする。

削る事もある、これは  
又タメの 鍔の心得である。  
又筈と云ひて、竹を作り、筈よりも  
少く太くする。

### 節の事

始め天名所に掲けたる一般の呼名の節で  
あるが、矢の五節と云はれて居るは、筈の  
節、四節と筈を一節として五節と称へ  
られて居るのである。

### 作の事

羽を作ぐは、普通三羽でこれを三立と云ふ

上羽を立羽と云ふ、走羽、内の羽を、摺羽、外の羽

を外翳と云ふ、切羽と云ふ、鍔、矢の、四羽で

作を、これを四立と云ふ、内、二、大羽であつて

大鳥を、用ひ上羽、走羽、下の羽を

遺羽と云ふ、他の二羽、即ち山鳥の引尾

一説に下と反對  
に上の羽を遺羽  
下を走羽と云ふ

小羽を外翳  
内を摺羽  
と云ふ、或は、  
など用ひらる、内外共、小羽と云ふ



### 交作の事

三羽と交せて作ぐと云ふ、三羽中、主たる

羽と走羽に作ぐ、二種の羽の時、立文、

割文とも云ふ

### 羽の事

羽は昔より真羽、即ち大鳥、鴈、即ち鷹

が最も珍重された事は、云ふまでもない事

である。

大鳥(鷹)(おほわし、(巻物))

大中黒 素黒 本黒

毒白 本白 切符(切圭)



雪白(白尾(十四枚の度の中に全く切符の羽のもの  
が極めて少くは、大鳥の  
白尾は、最も珍重された事)

石打 尾羽の左右両端のもの云ふ

例へば、金作り太刀  
佩き、二十四日居たり  
切圭の矢負、  
などである



これは、鷲を限らず、鷹の鳥に、あつた  
まゝにとよき味である

切符 時々軍記  
物語などに書かれ  
て居る

全様、彼の平家の  
大将、斎藤、実盛が

切符 時々軍記  
物語などに書かれ  
て居る

例へば 金作り太刀  
佩き二十四差たり  
切金の矢負ふ  
などである

石打 此れも右  
公様 彼の平家の  
大将斎藤実盛が  
東征の時 符を  
て石打の御矢を  
使用して居る

仕切羽  
鳥と鷹の  
の羽を鷹  
の文の如く  
切紙交へ  
たる羽と  
云ふ(古義  
三十五)

あまのお  
もての羽

あまの面  
舞臺に用中  
る藏面に似  
たる符羽

あまのおも  
もての羽  
舞臺に用中  
る藏面に似  
たる符羽



あまのおも  
もての羽

あまのおも  
もての羽

あまのおも  
もての羽

此符の羽は実在  
大い男山八幡宮  
の社宝にて一六  
七本分あるとの  
事である  
前画(三)は後三  
年佐々木中  
源義家の貞  
公の御腕に画  
かれたもので  
ある

太平記卷十三  
藤原道世條  
子可大(中畧)

あまの面の羽付  
たる平胡録  
の能き負ふ  
とあれは昔は  
実在したもの  
と思ふ

染羽  
染羽は家の白尾  
種 熊の白尾  
を染めたもの  
これに石打  
古くから用  
ひられた事大  
奇蹟物語  
保元物語等  
吾輩は  
に出で居る

大鳥中黒



石打 此れは鷲子限らず惣ての鳥にあら  
尾羽の左右両端のもの云ふ  
夫に作れると此の様  
まよふによき味である

尾白鷲(ニトリ)

此成鳥を曰うすべし  
と云ふ 符が異つて居る

うすべし(鷹 護田鳥尾)



狗鷲(いぬわし)



南鷹(くまたか)



鶴(つる)



雉(きじ)

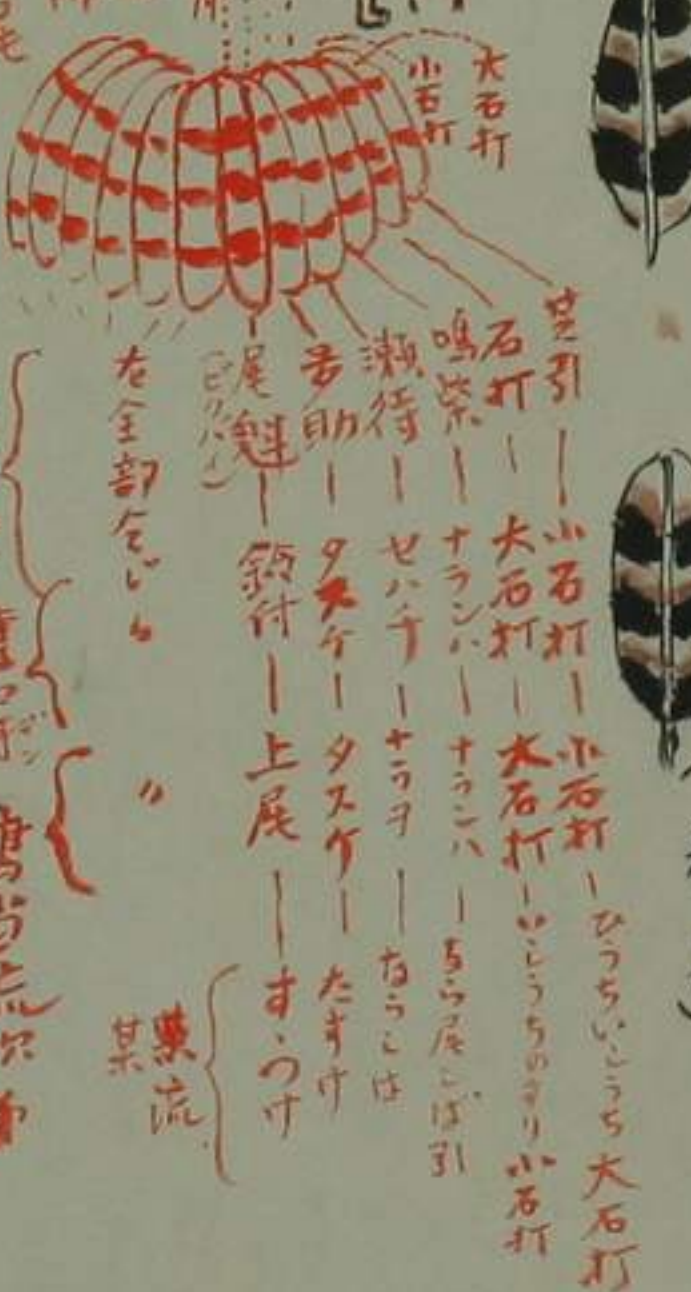


白鳥(はくちょう)

成鳥は純白 幼鳥は烟灰色を帯びたり  
大形の水鳥で 矢羽には 尻切、ホ口を用中

朱鳥(とき)

此鳥は現在非常によく僅に佐渡島  
に産 捕かくを禁せられて居る、お黒の尻切  
及尾羽は濃きトキ色を帯ぶ、翼の尻  
切とオリノが僅かに矢羽に用ひらる

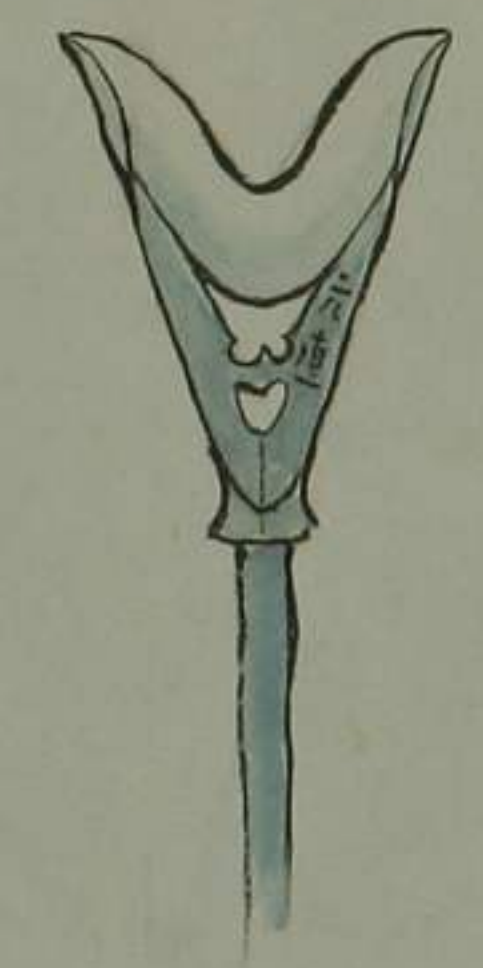


山鳥(やまどり) 各引尾



保元物語  
為朝は白地錦の直垂に...  
山鳥の尾の藤の皮にてはぎたる  
矢三十四差たるにありて山鳥も用ひ  
られて居る

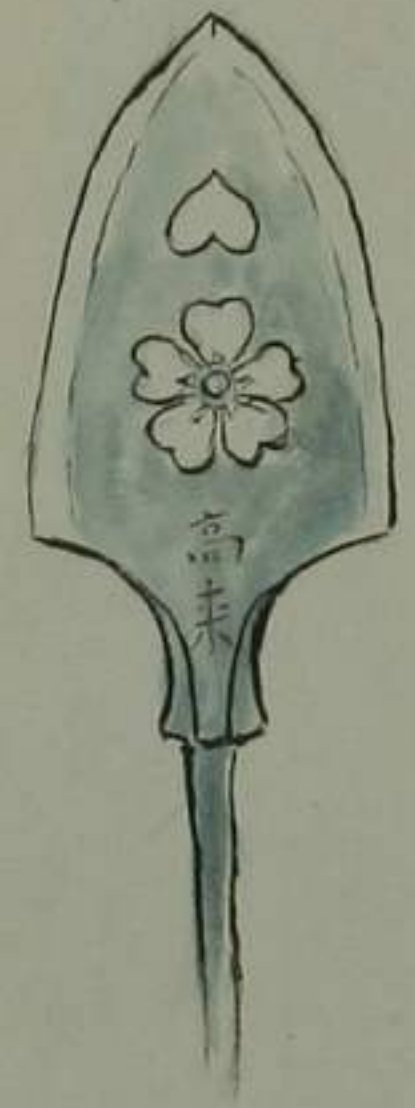
龍舌(りゅうげつ)



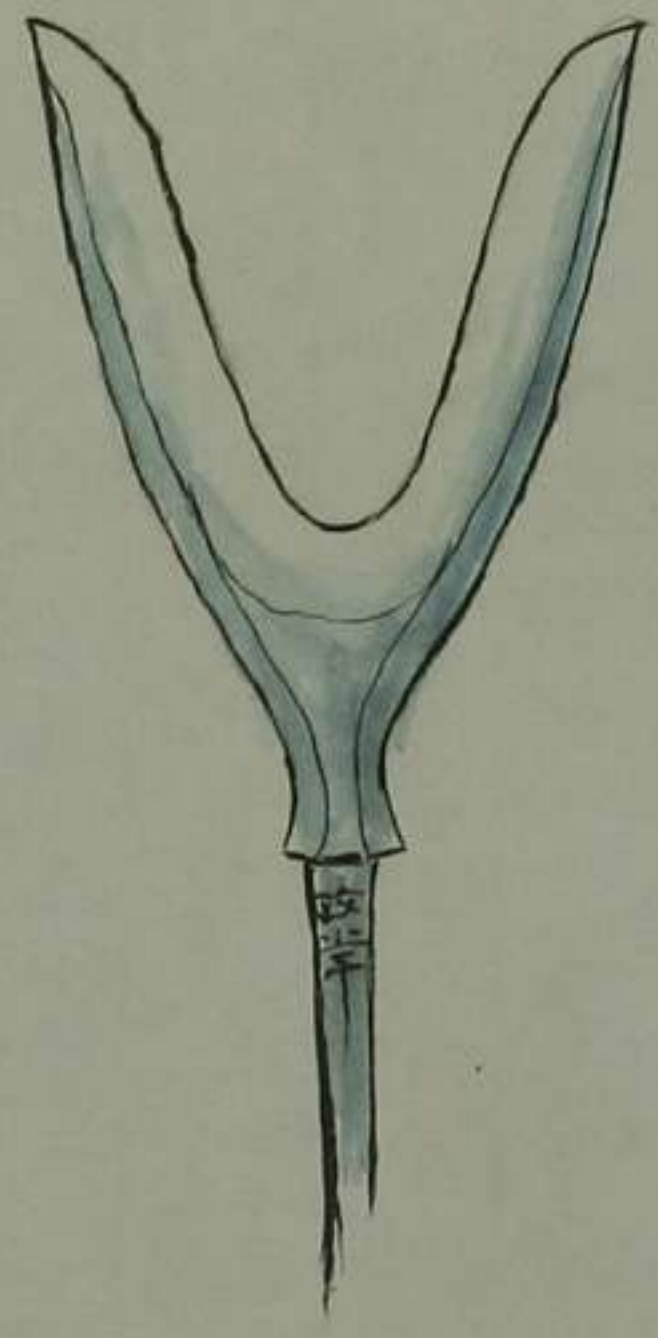
鯖尾(さばお) 狩股に近かきも少しく異る



鴈尾(かり) 矢根

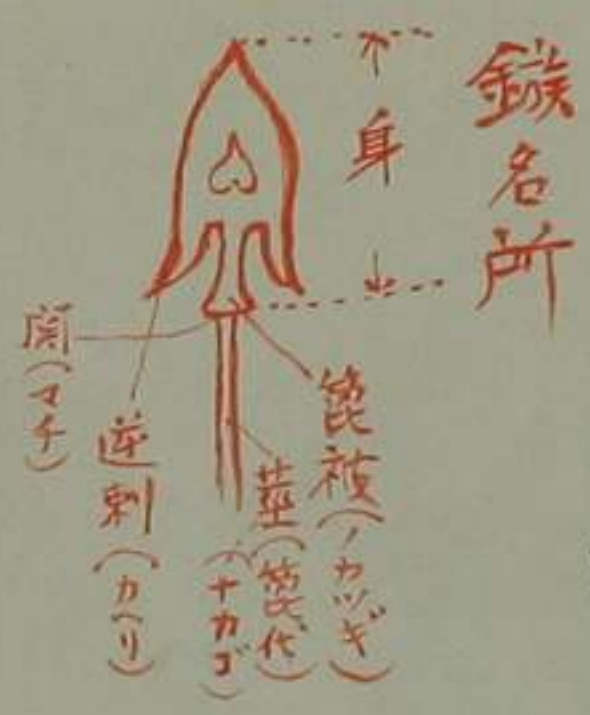


桜透し平根



狩股

鏃の事 鏃にツいて述べる事は相当弑教を要するが 々はその代表的のものを掲げる事とする



鷹三符三符



大鳥中黒

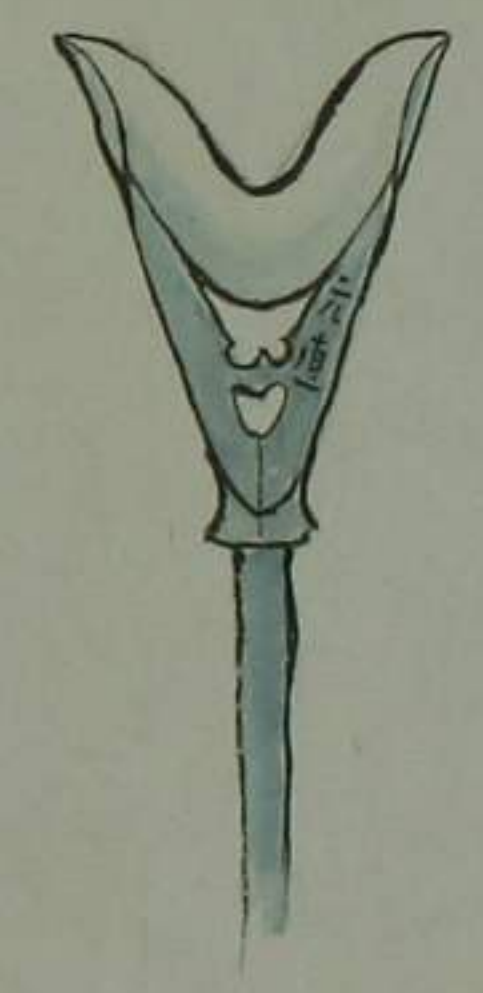
足利義満任大將の時義満の負ひし平胡録の矢に天の面を用いたが 當時既に野呂より8元になく公家より借りて使用直ちに返却した云々 此鳥は現在非常によく僅に佐渡島に産捕かくを禁せられて居る、羽黒の風切 及尾羽は濃きトキ色を帯ぶ、翼の風切とオリノが僅かに矢羽に用ひる

朱鳥(とき鶴) 此鳥は現在非常によく僅に佐渡島に産捕かくを禁せられて居る、羽黒の風切 及尾羽は濃きトキ色を帯ぶ、翼の風切とオリノが僅かに矢羽に用ひる

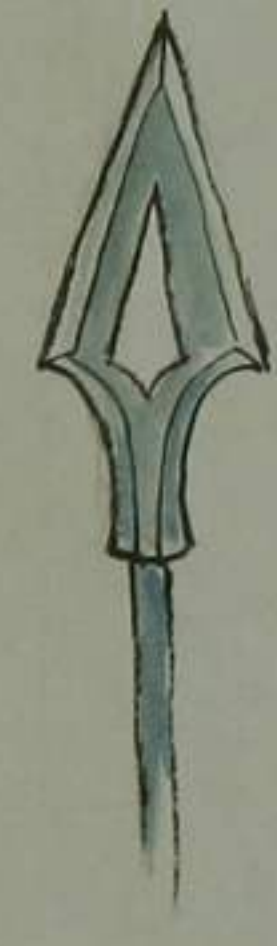
染羽 此羽は義満の白尾 種、野呂の白尾 を染めたもの、 此は、古くから用 ひられた、赤、 寺献物帳 保元物語、平家記 五右衛門、鐘、心、 に出て居る

鯖尾 (さばを)

狩股に近かきも少しく異なる



龍舌 (りゅうせつ)



以上は大体上差表差等に用ひらる、鏃であるが  
以下は征矢に用ひらる、ものである

定角 (じょうかく)

四角、三角、行れも肉厚く、大端余り鋭角  
なるもの



柳葉 (りゅうえつ)

此角なきもの



楨葉 (ちんえつ)

此角あるもの



蛇の尾 (へいのせ)

肉厚く定角に近きもの



權形 (かいはり)

鎬なきもの



鳥の舌 (とりのか)

鎬あるもの

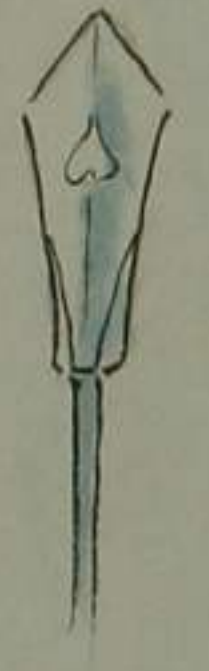


一説に左四も鳥舌の一種といふ

劔尻 (けんせき)



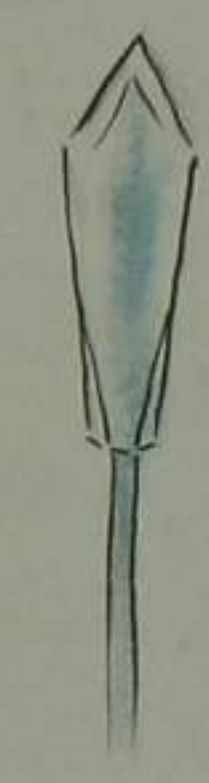
劔頭 (けんとう)



劔尻、劔頭は、しして区別するだけの  
もので、いづれ、猪の目の有無には関心ない



劔尻



劔頭

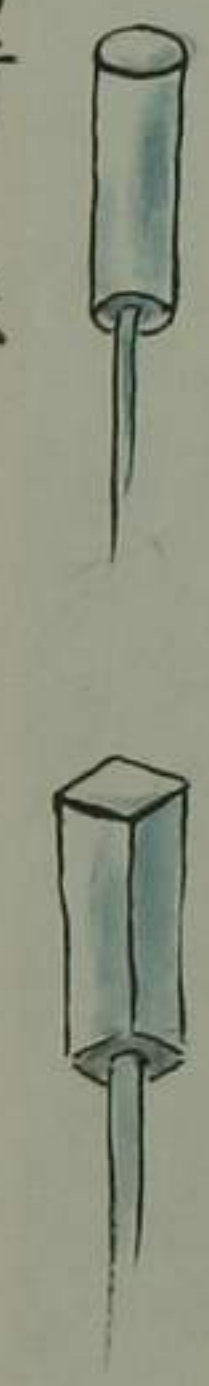


劔尻、劔頭は、しいて区別するだけのものではないが、猪の目の有世には区んこない

格割 木鋒、金神頭

全標の目的に使用されるもの丸ま、四角より先端の平ちりもの

此は、上下逆と居るも有標を示す



堅物射の鉄

持子堅物射の根として作られて居ないが参考の爲めに適當と思はるものぞたに揚ぐ、此根フツリと肉厚シ



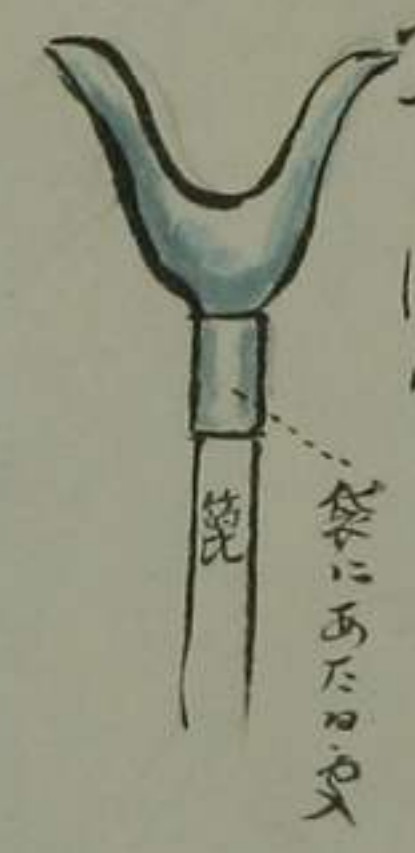
射母貝矢

此は白袋根大巻に口金を入れ、根元より六七寸麻を巻き、漆子でぬる鉄と口金との間に革一枚をいれるも、扱伝とする、此外

天作麻より巻く事あり

袋根 (ふくら根)

これは鎧の作りと公様で普通通軸によりて袋の中に入らまされしが袋根は圓の如く袋にかぶせて用ゆ



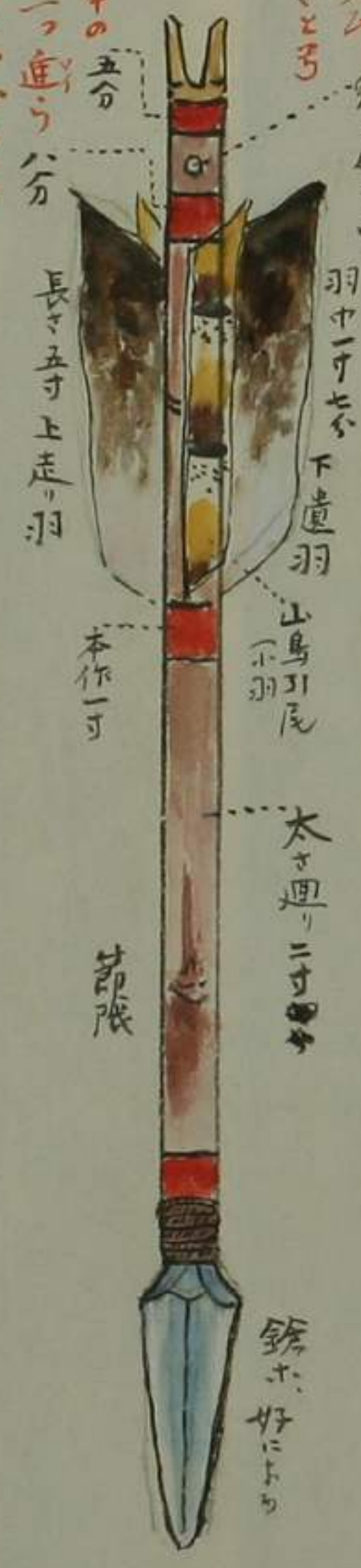
太平記

此外矢ではないが打根と云ひて予で射るのて

なく投げるものがある、これは矢種のつきた時よ腕母貝を腕にまきて敵に投げる、又は手にて直

母敵を突く場合もある、依て曰く突矢と云ふ、長船打の五寸から五寸位まで、先端に鎧の身を用ゆる

此は程、梨、吳竹、羽は真羽二立、小羽、山鳥引尾、答頭に紐を通す穴あり、作りによりては、答の中心から紐を通して鎧の中子の穴に連絡す



上差一筋抜きして、櫓の小間を空きたりけり、此矢誤たが、矢間の陰に立ちたりける、鎧武者のせんだんの板より、後の總角付の金物まで、裏表二重に通して、矢先二寸半のりあてたりける間、其兵櫓より落ちて二寸半は死にけり、これよりして、全射を空突の因幡とは名づけけり、此は此傳は予をもたず、此矢を三十六本も持て居たのであつ、三年竹に穂先より續けて居る中心即ち莖を、此竹の所まで通したものである